

この子らを世の光に

私たちの施設騰々舎では最重度の心身障がい者五十人が肩よせあつて懸命に暮らしている。彼ら皆はここに最後の希望を託してやってきている。

池田正行君はその中でも重度で、首を上げるのもやっとの車いすの生活。『騰々舎便り』にお母さんが手記を寄せ、わが子の生い立ちを語っている。その終わりの一節。

「はじめは施設へは、いかん、いかん、と言っていたが、私の体を心配したんでしよう。やっぱり母ちゃんも年やし、無理させちゃ悪いな、と本人から施設へ入るんやと言ったんです。今では、おれここから動かんけん、ここでずっと暮らすけん、と言っています。私はやっと安心です」と。

騰々舎にずっと暮らそう。―そう思い定めた子の無量の思い、こたえる母の心も限りなく愛しい。

障がいを負う者の生きゆく道はまず己が障がいを正面から受けとめることから始まる。池田君の日々は己が障がいを受容しゆく歩みである。某日、リハビリ訓練中指導

員の過失で骨折する。直ちに医大病院へ山道を直行。指導員と離れて診察室に入った時、初めて激痛を訴えたとのこと。指導員に心配をかけないため耐えに耐えていたのである。

障がいを受容するとは己が障がいに泣かないことだけではない。ひとの傷みもわがことのように分かることである。宿直あけの職員に「ご苦労さん」と、必ずねぎらうのも彼だ。

私の先輩、福祉の先達糸賀一雄は障がいの子らこそ「世の光」と言いきった。君は光の子だ。闇人間の自分こそ暗黒政治のギセイ者とわめく元首相と、なんとという対照か。歴史の進行とは闇への挑戦の人類の記録、歴史の創造は光を知る者によってのみ支えられる。

(一九八三年十月二十六日)